

子どもの読書活動推進計画

第3章 これまでの取組の成果と課題

●取組の成果

古賀市の子ども読書活動推進計画は、子どもがそれぞれの発達段階や個性及び興味・関心に応じ、日常的な読書活動ができるような環境の整備や活動支援を通じて子どもの読書活動の推進を目標に策定されました。そして、その目標を達成するために、三つの柱を基本に様々な子どもの読書活動が活発になるよう活動・啓発を行ってきました。

柱の一つである子どもの読書環境の推進と環境づくりでは、計画策定以前から始まった事業ではあるが、ブックスタート事業が親子での読書のきっかけづくりとして9割以上の保護者から支持され、家庭での読書環境の充実に寄与しているものと考えられます。平成28年には、きっかけづくりの更なる充実を図るため3歳児とその保護者を対象にセカンドブック事業を開始しました。

保育所（園）・幼稚園でも乳幼児の読書への興味を育むため、本や紙芝居を使ってお話し会、あるいは絵本の講演会などを保育、教育の一環として開催してきました。また、保育所（園）・幼稚園が所蔵する絵本を貸出しするなど、家庭での読書活動への支援も行っています。

学校では、司書教諭や図書司書を中心に、教育活動を通じて様々な本とふれあうことにより、子どもの読書への興味・関心を高め読書習慣の定着を図り、読解力や表現力の育成に努めてきました。そして、朝の読書活動や全校一斉読書、昼のお話し会、読書ボランティアやゲストティーチャーによる読み聞かせは、低学年の子どもたちには読書の楽しさを伝えることとなり、高学年、中学生には読書習慣の定着、不読者の減少につながっていきました。このような学校で行われる子どもの読書活動をより充実させ、市内小中学校ではそれぞれの学校図書館の情報を共有するために、ネットワークシステムを導入しました。このことにより学校間の図書資料の相互貸借が円滑に行われるようになっていきます。

各小学校で行なわれている「親子読書会」の歴史は古く昭和36年に始まっています。親子読書会は子どもを中心に家族と一緒に本を読み聞かせたり語り合ったりすることを基本に、会員同士の交流によって読書の幅を広げ、深める活動であり、その活動の発表の場として、親子読書のつどいを開催して親子での読書活動を支援しました。

その他、市内高等学校や特別支援学校でも「朝の読書」を行ったり、日常的に読書に親しむ機会を設けたりするなど、読書習慣の定着が図られています。

図書館では、学校段階が進むにつれて減少傾向にある子どもの読書量に対処するため、YA世代の子どもたちが気軽に本を手にとることができるようYAコーナーを設け、中学生、高校生の読書離れの歯止めを努めました。

このように、子どもの読書活動推進のために様々な試みを行ってきましたが、行うに当たっては、計画の二つ目の柱となる子どもの読書活動を推進する機関、団体との協力連携

とそのネットワーク化が欠かせません。そのため、古賀市では様々な子どもの読書活動を推進する機関、団体との連携・協力、情報提供を図り、円滑な取組ができるよう努めてきました。また、学校司書の研修会の開催や「読書ボランティア団体交流会」、「地域文庫連絡会」を行うことで、スキルアップを図り、情報の共有に努めてきました。

その他、市立図書館では機関・団体への図書資料の団体貸出しを行うことにより、支援も行なっています。

この計画の目標を達成し、子どもが読書の楽しさを知ることができるようにするには、三つ目の柱である子どもの読書活動への理解と関心の普及も大切です。

古賀市では、読書の楽しさや大切さを積極的に伝え読書の輪を広げていくために、平成23年度には福岡県が行った「小学生読書リーダー推進事業」を利用して子どもたちの読書リーダーの養成を行い、古賀市の読書活動推進事業としてその後も読書リーダーを養成（RLP事業）しました。読書リーダーとなった子どもたちは、それぞれの学校で読書の楽しさや大切さを伝える活動を行い、読書活動への理解と関心の普及のため活躍しました。そして、平成28年度からは中学生読書サポーター養成事業も新たな取組として始めています。

子どもの読書活動を推進する機関、団体が行った取組は、古賀市の広報媒体や地域情報誌を通じて案内を充実したことにより、関心の高まりや参加者の増加が見られました。

また、読書の楽しみ、本の世界の素晴らしさを多くの子どもたちへ伝えたいと、ボランティア活動もさらに活発になり、そして新たな団体も発足し市民の理解と関心も高まりました。

●今後の課題

国が策定した第三次子ども読書活動推進計画では、不読率の改善が大きな課題として取り上げられています。平成28年の「第62回学校読書調査」では、1か月間に読んだ冊数は小学校4年生から6年生は11.4冊、中学生は4.2冊、高校生は1.4冊となっていますが、古賀市の調査でもその傾向は変わらず、学年が進むにつれて読書量は減少している結果となっています。

このような状況を改善するためには、読書の喜びや楽しさを子どもたちへ伝えていく必要があります。またその大切さを保護者へ理解、関心をもってもらう必要があります。

家庭や地域、学校や図書館での読書環境の充実、子どもへ本を手にとらせる工夫、保護者への啓発、子どもの読書活動の推進に携わる機関や団体間の連携や協力、読書の専門機関としての公立図書館の実践と支援をさらに充実させなければなりません。

ことばを学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにする読書の持つ計り知れない価値を認識して、子ども読書活動をさらに推進することが望まれます。